

# 場の理論ゼミ

Toshiya Tanaka

October 31, 2022

## 1 Introduction

- B4 の後期は [PS95] を研究室のゼミで読むことになったので、学びを記録したいと思います。
- 教科書中の式は PS (number) のように記します。
- 教科書の公式ページは [こちら](#) です。

## 2 The Klien–Gordon Field

- p.14 で、 $E = \sqrt{p^2 + m^2}$  の方で計算した propagator

$$U(t) = \frac{1}{2\pi^2 |\vec{x} - \vec{x}_0|} \int_0^\infty dp \sin(p|\vec{x} - \vec{x}_0|) e^{-it\sqrt{p^2 + m^2}} \quad (2.1)$$

を直接評価する方法は、本でも引用されているように、[GR80, p.491]<sup>i.</sup>を見れば良い。

$$\int_0^\infty x e^{-\beta\sqrt{\gamma^2 + x^2}} \sin \beta x \, dx = \frac{b\beta\gamma^2}{\beta^2 + b^2} K_2(\gamma\sqrt{\beta^2 + b^2}) \quad (2.2)$$

という式があり、この収束する積分の指数の肩を虚数倍ひねる、いわゆる解析接続をしていると解釈できる。元の積分は  $p$  が無限で発散し、虚数の指数関数は振動するので、被積分関数を見ると発散してしまうことがわかる。<sup>ii.</sup>

- PS (2.31) で  $\delta(0)$  の無限大をむしることについて、
  - GR を考えるときは無視できない。
  - SUSY を入れると出ない。
- PS (2.33) の計算は奇関数が対称区間の積分で消えることを考える。素直に代入して、

$$\vec{P} = - \int d^3x \, \pi(\vec{x}) \vec{\nabla} \phi(\vec{x}) \quad (2.3)$$

$$= - \int d^3x \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \int \frac{d^3p'}{(2\pi)^3} \left( \left( -i\sqrt{\frac{\omega_p}{2}} \right) (a_p - a_{-p}^\dagger) e^{i\vec{p}\cdot\vec{x}} (i\vec{p}') \frac{1}{\sqrt{2\omega_{p'}}} (a_{p'} + a_{-p'}^\dagger) e^{-i\vec{p}'\cdot\vec{x}} \right) \quad (2.4)$$

となり、

$$\int \frac{d^3x}{(2\pi)^3} e^{i(\vec{p} + \vec{p}')\cdot\vec{x}} = \delta^{(3)}(\vec{p} + \vec{p}') \quad (2.5)$$

を使うと、

$$\vec{P} = - \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} (-\vec{p}) \frac{1}{2} (a_p - a_{-p}^\dagger)(a_{-p} + a_p^\dagger) \quad (2.6)$$

となる。今、 $(a_p a_{-p} - a_{-p}^\dagger a_{-p} + a_p a_p^\dagger + a_{-p} a_p^\dagger)$  となるが<sup>i.</sup>、 $p$  と  $-p$  が交互に入っているものは奇関数になり、消える。

$$\int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} (a_p a_{-p} + a_{-p}^\dagger a_p) = 0. \quad (2.7)$$

すると、添字の運動量は、符号が一致したものしか残らず、全空間の積分なので符号を変えて、全て  $+p$  で計算する

<sup>i.</sup> この本はネット上でも見れるが、1200 ページくらいあり、とても重いので注意。

<sup>ii.</sup> この一連の議論は d 氏に教えていただいた。

テクニックが使える。これより、

$$\vec{P} = \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} \frac{1}{2} (a_p a_p^\dagger - a_{-p}^\dagger a_{-p}) \quad (2.8)$$

$$= \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} \left( a_p^\dagger a_p + \frac{1}{2} [a_p, a_p^\dagger] \right) \quad (2.9)$$

$$= \int \frac{d^3p}{(2\pi)^3} \vec{p} a_p^\dagger a_p \quad (2.10)$$

となる。最後の  $[a_p, a_p^\dagger] = \delta(0)$  は偶関数と思うと消える。

- PS (2.40) は三次元空間の  $d^3p/(2E_p)$  で measure を入れたものだが、 $\mathbb{R}^{1,3}$  に埋め込むと  $p^0 > 0$  の方の双曲超平面上の積分と思える。
- PS (2.41), PS (2.42) から、 $\phi(x)|0\rangle_{\text{QFT}} \sim |\vec{x}\rangle_{\text{QM}}$ ,  $\langle 0|\phi(x)|p\rangle_{\text{QFT}} \sim \langle x|p\rangle_{\text{QM}} = e^{ipx}$  と対応がつく。
- section 2.4 では今まで、時間に依存しない Schödinger 描像でやっていたものを、Heisenberg 描像に移す。やりかたは、QM と同じように  $\mathcal{O}_{\text{Heisenberg}} = e^{iHt} \mathcal{O}_{\text{Schrödinger}} e^{-iHt}$  とする。
- 生成消滅演算子の Heisenberg 描像は  $e^{iHt} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{iHt^n}{n!}$  と  $H^n a_p = a_p (H - E_p)$  など<sup>iii</sup>を用いて、 $a_p e^{-iE_p t}$  などになり、場の演算子も綺麗にまとまる。
- PS (2.51) の最後の評価は、鞍点ではないが、振動の遅いところが積分に最も寄与すると思うと、 $E = m$  の値を採用すると考える。
- branch cut をまわる積分 PS (2.52) の計算の仕方は [physics SE. 285126](#) の回答がわかりやすい。まず、複素関数で平方根をナイーブに考えてしまうと、 $\sqrt{i}$  などと書いたときに、 $e^{i\pi/4}$  でも  $e^{3i\pi/4}$  でも二乗したら  $i$  になるので、 $i \mapsto e^{i\pi/4}, e^{5i\pi/4}$  となってしまう写像としてよくない。このようなときに  $i = e^{i\pi/2} \mapsto e^{i\pi/4}, i = e^{5i\pi/2} \mapsto e^{5i\pi/4}$  と考える。一般に、複素数の変革  $\theta$  が  $\theta \in [0, 2\pi)$  と  $\theta \in [2\pi, 4\pi)$  で区別し、複素平面二枚を定義域と思うという手法を考える。この拡張した定義域を Riemann 面という。このとき、 $\theta: 2\pi - \epsilon \rightarrow 2\pi + \epsilon$  は連続的につながっていて、この二枚をつないでくっつけるところを branch cut という。

PS (2.52) の積分は、実軸上の積分路を連続変形することにより、branch cut に沿う積分に変換するという方針で行う。このとき注意すべきことは、積分路は常に一枚目にあり、branch cut の両辺では定義域の偏角が  $2\pi$  ずれており、したがって、符号が違う値が出てくることである。

具体的に積分は次のようにして行う。まず、球座標に変数変換して、積分する。

$$D(x) = \int_0^\infty dk \int_0^\pi d\theta \int_0^{2\pi} d\phi k^2 \sin \theta \frac{e^{-i\vec{k} \cdot \vec{x} \cos \theta}}{(2\pi^3) 2\sqrt{k^2 + m^2}} \quad (2.11)$$

$$= \frac{i}{8\pi^2} \int_0^\infty dk \frac{k}{\sqrt{k^2 + m^2}} (e^{-ikx} - e^{ikx}) \quad (2.12)$$

$$= \frac{-i}{8\pi^2} \int_{-\infty}^\infty dk \frac{k}{x\sqrt{k^2 + m^2}} e^{ikx} \quad (2.13)$$

$$= \frac{-1}{8\pi^2 x} \frac{\partial}{\partial x} \int_{-\infty}^\infty dk \frac{e^{ikx}}{\sqrt{k^2 + m^2}}. \quad (2.14)$$

これより、積分

$$I := \int_{-\infty}^\infty dk \frac{e^{ikx}}{\sqrt{k^2 + m^2}} \quad (2.15)$$

を計算すればよい。

被積分関数の pole は  $k = \pm im$  にあり、 $\sqrt{k^2 + m^2} = \sqrt{k + im} \sqrt{k - im}$  なので、branch cut は  $(-\infty, -im], [im, \infty)$  に取れば良い。

ここで、積分路を Cauchy の積分定理を用いて、次のように変形する。

$$I = \int_{im}^{im} dk \frac{e^{ikx}}{-\sqrt{k^2 + m^2}} + \int_{im}^{i\infty} dk \frac{e^{ikx}}{\sqrt{k^2 + m^2}} = 2 \int_{im}^{i\infty} dk \frac{e^{ikx}}{\sqrt{k^2 + m^2}} \quad (2.16)$$

となる。これにより、 $k = i(y + m)$  と変数変換すれば

$$I = 2 \int_0^\infty dy \frac{e^{-(m+y)x}}{\sqrt{(y+m)^2 - m^2}} \quad (2.17)$$

<sup>iii</sup>. 生成消滅のこのような関係式は、片方について調べると、もう片方はエルミート共役を取れば直ちに成り立つことを確認できる。

となる。さらに、 $y + m = u$ ,  $u = \cosh \eta$  と変数変換することで、

$$I = 2 \int_1^\infty du \frac{e^{-mux}}{\sqrt{u^2 - 1}} \quad (2.18)$$

$$= 2 \int_0^\infty d\eta e^{-mx \cosh \eta} \quad (2.19)$$

となる。propagator に戻ると、

$$D(x) = \frac{-1}{4\pi^2} \frac{\partial}{\partial x} \int_0^\infty d\eta e^{-mx \cosh \eta} \quad (2.20)$$

$$= \frac{-1}{4\pi^2} \int_0^\infty d\eta (-m \cosh \eta) e^{-mx \cosh \eta} \quad (2.21)$$

となり、 $\sinh \eta = s$  とおくことで、

$$D(x) = \frac{m}{4\pi^2} \int_0^\infty ds e^{-mx \sqrt{1+s^2}} \quad (2.22)$$

$$\simeq \frac{m}{4\pi^2} \frac{1}{2} \sqrt{\frac{2\pi}{mx}} e^{-mx} \quad (2.23)$$

$$= \frac{m^2}{4\pi^2} \sqrt{\frac{\pi}{2(mx)^3}} e^{-mx} \quad (2.24)$$

となり、空間方向には  $e^{-mx}$  程度しか伝播しないことがわかる。

- PS (2.56) では step function<sup>iv</sup> や delta function の微分を考える必要がある。これらは積分をされたときの振る舞いにより、定義するのがうまい方法なので、次のように考えることができる。

$$\int_{-\infty}^\infty dx f(x) \frac{d\theta(x)}{dx} = [f(x)\theta(x)]_{-\infty}^\infty - \int_{-\infty}^\infty dx \frac{df(x)}{dx} \theta(x) \quad (2.25)$$

$$= f(\infty) - \int_0^\infty dx \frac{df(x)}{dx} \quad (2.26)$$

$$= f(\infty) - f(\infty) + f(0) \quad (2.27)$$

$$= f(0) \quad (2.28)$$

$$= \int_{-\infty}^\infty f(x) \delta(x) \quad (2.29)$$

により、 $d\theta(x)/dx = \delta(x)$ ,

$$\int_{-\infty}^\infty dx f(x) \frac{d\delta(x)}{dx} = [f(x)\delta(x)]_{-\infty}^\infty - \int_{-\infty}^\infty dx \frac{df(x)}{dx} \delta(x) \quad (2.30)$$

$$= \int_{-\infty}^\infty dx \left( -\frac{df(x)}{dx} \delta(x) \right) \quad (2.31)$$

により、 $f(x) d\delta(x)/dx = -df(x)/dx \delta(x)$  となる。

- PS (2.56) の微分は  $x$  に関しておこなっている。また、 $\delta(x^0 - y^0)$  があるので、積分したら同時刻になると思い、 $\text{CCR}[\phi(x), \pi(x)] = i\delta^{(4)}(x - y)$  を使っている。
- また、 $(\partial^2 + m^2) \langle 0 | [\phi(x), \phi(y)] | 0 \rangle = 0$  は Klein-Gordon 方程式からゼロになる。
- propagator の pole の避け方は経路をいじって避けるというよりは、pole 自身を  $i\epsilon$  でずらして、 $\epsilon \rightarrow 0$  の極限をとると思うのが良い<sup>v</sup>。
- p.33 の最後は  $p^2 = m^2$  はそのような粒子が実際に観測されるということだけで、一連の議論には使っていないと思う。

### 3 The Dirac Field

- PS (3.2) の不変性の書き方が、分かりづらく感じる。Lorentz 変換  $\Lambda$  により、位置は  $x \mapsto x' = \Lambda x$  と変換し、場は  $\phi(x) \mapsto \phi'(x')$  と変換するが、座標は動かさず、場を動かすという立場を取っていて、変換後も変換前と同じ  $x$  を使うと思うと、 $x' = x$  と起き直して、もとの  $x$  は  $\Lambda^{-1}x$  になるので、 $\phi'(x) = \phi(\Lambda^{-1}x)$  という書き方をしている。

<sup>iv</sup>. 自分が知っている定義は、 $\theta(0) = 1/2$  とするものだが、 $\theta(0) = 0$  とする定義もあるらしいが、どこかで綻びはないのか。

<sup>v</sup>. 経路をずらした場合は、どのように避けても値は pole を上下にずらした場合の平均で同じ値になると思う。こちらの記事が参考になる。

- 微分に関しては,  $y := \Lambda^{-1}x$  と思うと,

$$\partial_\mu \phi'(x) = \frac{\partial}{\partial x} \phi(y) \quad (3.1)$$

$$= \frac{\partial y}{\partial x} \frac{\partial}{\partial y} \phi(y) \quad (3.2)$$

$$= \Lambda^\mu_\nu \partial_\mu \phi(\Lambda^{-1}x) \quad (3.3)$$

となり, 右辺は  $x$  で微分したものに,  $\Lambda^{-1}x$  を代入していると思える. 例えば,  $f(x) = x + x^2$  という関数があって,  $f(ax) = (ax) + (ax)^2$  の微分は,  $df/dx = x + 2x$  に  $dax/dx = a$  をかけて,  $ax$  を代入したものであると思える.

- Maxwell 理論の Lagrangian  $\mathcal{L}_{\text{Maxwell}} = -(F_{\mu\nu})^2$  から Euler-Lagrange 方程式を計算して, Maxwell 方程式を導出する際は, 場の微分で微分するときには注意が必要である. 特に, 二乗のまま計算するとややこしいので,  $(F_{\mu\nu})^2 = F_{\mu\nu}F^{\mu\nu}$  であることと,  $\partial(\partial_\rho A_\sigma)/\partial(\partial_\mu A_\nu) = \delta^\mu_\rho \delta^\nu_\sigma$  や  $\partial(\partial^\rho A^\sigma)/\partial(\partial_\mu A_\nu) = g^{\mu\rho}g^{\nu\sigma}$  に注意して, 計算する.
- PS (3.16) が PS (3.17) の交換関係を満たすことを確認するとき,  $[AB, C] = A[B, C] + [A, C]B$  などを使うと簡単に計算できる. 例えば,  $[x^\mu \partial^\nu, x^\rho \partial^\sigma]$  の項は  $[x^\mu \partial^\nu, x^\rho \partial^\sigma] = x^\mu x^\rho [\partial^\nu, \partial^\sigma] + x^\mu [\partial^\nu, x^\rho] \partial^\sigma + x^\rho [x^\mu, \partial^\sigma] \partial_\nu + [x^\mu, x^\rho] \partial^\sigma \partial^\nu$  とすると, 微分同士,  $x$  同士は可換なので消えて,  $[\partial^\mu, x^\nu] = g^{\mu\nu}$  から, すぐにわかる.
- PS (3.17) の定義は, 他の本だと片方  $g_{\mu\nu}$  になっているが, これは足を片方上げた状態であるので consistent. これにより,  $\alpha, \beta$  などは単なる行列の足ではなく, Lorentz ベクトルの足なので, PS (3.20), PS (3.21) を計算するとき, 足の上下に応じて, 空間成分ならマイナスをかけないといけない.

## References

- [GR80] I. S. Gradshteyn and I. M. Ryzhik, *Table of integrals, series, and products*, Academic Press, New York, 1980.  
 [PS95] M. E. Peskin and D. V. Schroeder, *An Introduction to quantum field theory*, Addison-Wesley, Reading, USA, 1995.